



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

42

セリーヌ

夜の果ての旅 生田耕作・大槻鉄男訳

中央公論社

シリーズ

訳者 生田耕作
大槻鉄男

Illustrations :
Droits réservés A.D.A.G.P., PARIS

昭和39年10月1日初版印刷
昭和39年10月12日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)振替東京34

目次

夜の果ての旅

年譜 解説

502 484 3

夜の果ての旅

ひとの世は

冬の旅、夜の旅

一筋の光も射さぬ空のもと
われらは道を求めゆく

「スイス衛兵の歌」一七九三年

旅は、有益だ、そいつは想像力を働かせる。そのほかはすべて失望と疲労を与えるだけだ。僕の旅は完全に想像のものだ。それが強みだ。

それは生から死への旅だ。ひとつも、けものも、街も、自然も一切が想像のものだ。これは小説、つまりまったくの作り話だ。リトレもそう定義している。まちがいない。

それに第一、これはだれにだってできることだ。目を閉じさえすればよい。

すると人生の向こう側だ。

ことの起こりはこうだ。言いだしつべは僕じゃない。

とんでもない。僕に水を向けたのは、アルチュル・ガナートだ。アルチュルも、やつぱり学生、同じ医学生で、友人だ。クリシイ広場で、またばったり出会ったものさ。昼飯のあとだった。先方は、話があるという。こっちは聞き役。「立ち話もなんだ」とやつこさん。「はいろうや！」ついてはいった。まずは、そんな次第だ。「このテラスは」とやつこさんが切り出す。「半熟卵を食うとこさ！ 奥にはいろろう！」さて、気づいたことは、暑さのせいで、表通りには、人っ子ひとりいない。まるつきり、車一台も。寒さがきびしいときも、やつぱり同じ。通りはがらんどろ、とくる。そのことで、こう言いだしたのは、紛れもない、やつこさんだ。「パリの人間は年じゆう忙しそうな面おもてをしているがね。ほんとは、朝から晩まで、ぶらぶらしてるだけさ。その証拠に、暑かったり寒かったり、散歩に向かんだ日になると、さつぱり姿を見せん。みんなすつこんで、クリーム・コーヒーかビールでもちびちびやってるのさ。そんなもんさ！ 《スピード時代》が聞いてあきれよ！ 《偉大なる変化》だ

つて！ 誼うたい文句もほどほどに願いたいね！ 実際のところは、何ひとつ変わつちやいない。相も変わらぬ連中の自惚うぬぼれ、それだけさ。そういや、こいつも昨日今日に始まったことじゃない。言葉だけさ、いや言葉だって、どれほども変わつちやいない！ 数にすりや知れたものさ、それも、どうでもいい言葉だけ……」さて、憂国の名言を吐いてすつかりご機嫌きげんになった僕たちは、腰をすえてカフェの婦人客に見とれだした。

そのあと、話題はボワンカレ大統領(一九一三〜二〇〇年)のことになった。ちやうどその日は、午前中、大統領の臨席のもとに子犬の品評会が催される予定だった、いつものまにか、その記事を載せた『ル・タン』紙のことに、話題は移っていた。「さすがは、一流新聞だよ、『ル・タン』紙は！」ついでに、ちよつかいをだしたのは、やつこさん、アルチュル・ガナートの奴だ。「フランス民族の擁護にかけちゃ、まずこの新聞の右に出るものはなからうて！」——「ご苦労な話さ、フランス民族なんてありやせんのに！」こっちはすかさずやり返す、学のあるところを見せる気で。

「ばか言え！ なくてどうする！ すばらしい民族さ！」やつこさんもあとへはひかない。「それどころか、世界じゆうさがしたって、こんなすばらしい民族があるもん

か、文句のある奴は、大馬鹿野郎だ！」やっこさん、青筋を立ててまくし立てる。もちろん、こつちも負けぢやない。

「でたらめ言うな！ 民族なんて、君が言う民族なんて、もとをただせば、おれたちみたいなの、いくじなしの寄合いさ。目やにをため、虱をわかし、ぶるぶる震えていた連中さ。世界の方々で打ち負かされ尻尾をまいて逃げだしてきた連中さ。飢えと、疫病と、皮膚病と、寒気に追いたてられ、この土地に流れついてきた連中だよ。海をせいで先へ行けなかつた、それだけのことさ。フランスなんて、そんなものさ、フランス人なんて、そんなとこさ」

「バルダミュ」すると、やっこさん、厳肅な悲壯な面もちで言い返したもんだ。「おれたちの先祖はどこへ出たつて恥ずかしくないご先祖だよ、悪口はよせ……」

「そのとおりさ、アルチュール、まったく、仰せのとおりさ！ 陰險で、腰抜けで、強姦されようが、ふんだくられようが、はらわたをえぐり出されようが、からつきしていくじなし、そういう点は、おれたちにそっくりだね、まったくどこへ出しても恥ずかしくないご先祖様だよ！ 君の言うとおりさ！ おれたちはちっとも変わらん！ 靴下から、主人から、意見まで。たまに変わったときは

手おくれ、それじゃ変わらんもいっしょとくるさ。おれたちは生まれつき忠実にできてるのさ、そしてそいつがおれたちの命取りさ！ 簡単に兵隊に引っぱり出され、一人残らず英雄に祭り上げられ、物まね猿みたいに、空しい文句をたたき込まれ、《疫病神》のお気に入りのお家来そっくりさ、おれたちは。そいつにおれたちは取り憑かれてるのさ。神妙にせんことには、絞め殺される……首のまわりにはそいつの指がからみついてる、年がら年じゆう、そいつが邪魔っけで、言いたいことも言えん、食わんがためには用心しなくちゃ……なんでもないことで、絞め殺される……こんなものが人生と言えるかい……」

「愛があるさ、バルダミュ！」

「愛は無限とおいでなすつたね、アルチュール、そんなものなら犬にだってあるさ。いっしょくたにはされたくないね！」こつちはやり返す。

「大きくでたな！ アナーキストだよ、おまえさんは。要するに、それだけさ！」

どんな場合にも、ちよつびり天の邪鬼を気取りたいだけ、見えすいてる、それに進歩的意見と名がつけばなんでも結構というわけだ。

「ぬかしたな、いかにも、おれはアナーキストさ！ ね



つきとした証拠を見せてやろう、おれがつくった文章をな。いうなれば社会に対する復讐の祈りさ。よく聞かがいい。《黄金の翼》という題さ……」そして奴の面前で朗読して聞かせた。

《一分二分、一銭二銭を数える神。官能に狂った、豚のようにうめく、やけっぱちの神。ところきらわず舞い降り、下腹を投げ出し、愛撫に身をゆだねる、黄金の翼を持った豚、それだ、それがおれたちの神様だ。みんな抱き合おうぜ!》

「そんなちっぽけな文章が実際になんの効果があるもんか、おれは、既成秩序の味方だね、それに政治は性に合わん。むろん、祖国のために一命を投げ出せと言われた日には、喜び勇んで応ずるつもりさ」——やつこさんは答えたもんだ。

おりしも戦争は気がつかん間に僕たち二人のほうに歩み寄っていたのだ、それに、僕の頭はすでにどうかなっていたのだ。この短いが激しいやりとりで僕は疲れきっていた。おまけに、チップがもとで給仕から、うさんくさい目つきで見られ興奮していたせいもある。結局、僕たちは、アルチエルとは、最後に、完全に仲直りした。

ほとんど意気投合にこぎつけた。

「そりやそうさ、結局は、そういうことさ」こっちは、折れて出た。「だけど、要するに、おれたちはみな、大きな懲役船につながれて、ありつたけの力で漕がされていようなもんさ、これだけは間違いないときさ……針のむしろにすわらされ、死物狂いで漕ぎまくっているようなもんさ！ おまけに、報酬ときたらどうだ？ ひでえもんさ！ 棍棒でどやされるのがおちだ。みじめな暮らしに、嘘八百、そのうえ、べてんのおまけとくる。仕事開始！ 奴らのお声がかかる。そいつが、奴らの仕事か、輪をかけて、えげつないしろものとする。下の船底じゃ、はあはあ息をきらし、悪臭にまみれ、擧丸から油汗をにじませてさ、ところがどうだい！ 上の甲板じゃ、涼しい場所に、ご主人たちがたむろして、おれたちの苦勞なんかどこ吹く風で、香水でふくれた薔薇色の別嬪連をお膝の上のつけてござる。おれたちは甲板に呼び出される。すると、やつこさんたち、山高帽を頭にのつけて、がなり立てる。『なにをば、やば、やしとる、戦争だ！』とおいでなさる。『ただちに攻撃開始、目標はナンバー・ツ一祖国のやくざども。脳天をぶつ飛ばせ！ 行け、行け！ 要るものはみな甲板にそろえてある！ みんなで喚声をはり上げるんだ！ 威勢のいいところを聞かすん

だ、敵の野郎が震えあがるように！ 《ナンバー・ワン祖国、万歳！》遠くまで聞こえるようにな！ いちばん大声でどなった奴には、褒美に、勲章と、イエス様おくだしの鉄砲玉だ！ いいか！ 海の上でくたばりたくない奴は、陸の上でくたばらしてやる、そのほうが、うんと早く片づくぞ！』

「まったくそのとおりさ！」アルチュルの奴、いやに神妙に、相槌をうつ。

ところが、突然そこを、僕たちがテーブルについたカフェの真ん前を、軍隊の行進が通りかかったというわけだ。先頭には大佐が馬にまたがり、おまけに、大佐のすばらしく颯爽たる勇姿！ 僕は、ひとたまりもなく、愛国の情熱に取り憑かれてしまった。

「ようし、実地検査だ！」アルチュルに向かって叫ぶと、僕は、いきなりその場から、志願兵の仲間飛び込みに駆けだした。

「ばかなまねはよせ……フェルディナン！」やつこさんは、アルチュルは、どなり返した。僕の勇ましい行為が周囲の連中に生みだした効果に、やつこさん心証をそこねたんだらう。

そんなふうにとられたのは心外だった。が、それくらいでは気は変わらなかった。駆けだしたてまえだ。いま

さら、あとにひけるかい！ 腹の中で考えた。

「いまにわかるさ、どっちがばかか！」それでも、大佐と軍楽隊を先頭に立てた部隊のあとについて町角を曲がる前に、奴に向かつてどなり返す余裕はあった。これがいきさつだ。

それから、長い行進がつづいた。街路はあとからあとからつづき、おまけに沿道には市民や女房連が出て僕たちに声援を送り、花束を投げた、露台からも、駅の前でも、人であふれた教会の中からも。たいへんな人数だった、愛国者は！ そのうちそれは、愛国者の数は、へりだした……雨が降りだした、それからはますます少なくなり、やがて声援はまるきり、沿道には、人声ひとつ聞こえなくなった。

おや、もうおれたちだけか？ 前も後ろも？ 軍楽はやんでいた。(結局)と、一部始終を見てとったとき、考えた。(あとはおもしろそうにない！ 初めっからやり直しだ！) 引っ返しにかかった。が、時すでに遅し！ 知らぬ間に僕たち市民の後ろで門は閉じられていた。万事休す。袋の鼠だ。

一度はいれば、ぬけられっこない。僕たちは馬に乗せられた、ところが、馬の背中にふた月もいたかと思うころ、また地面に降ろされた。たぶん経費がかさみすぎたんだろう。そのうち、ある朝、大佐の乗馬が見えなくなった、伝令が持ち逃げしてしまったのだ、かきも行くえが知れなかったが、おおかた、どっかの雪隠へでも逃げこんだんだらう。そこなら、道のと真ん中みたいにやすやすと弾は飛んでこない。それというのが、よりによってこへ、道のと真ん中へ、ついに僕らは、大佐と僕は飛び出す羽目になったのだ、僕は僕が命令を書き入れる伝令簿の携帯係だ。

道のずつとむこう、目のとどきりぎりのあたりに、真ん中に二つの黒点が見える、見た日にはこつちと変わらないが、そいつはたつぷり十五分前から射撃に余念ない二人のドイツ兵だ。

やっこさんは、大佐殿は、たぶんその二人がなんのために撃っているかご存じだったのだから、ドイツ兵のほうもおおかたご存じだったのだから、ところが、僕には、かきもく、わからなかった。いくら昔のことを思い返し

てみても、僕は奴らから、ドイツ人から、恨みを買う覚えはなかった。せいぜい親切に礼儀正しくふるまっていたつもりだ。奴らとは、ドイツ人とは、僕はまんざら知らぬ仲じゃない、奴らのところで学校へ通っていたこともある、子供のころ、ハノーヴァ（ドイツ北部の）の近くでだ。奴らの言葉も話した。そのころは、狼みたいな色あせたおどおどした目つきの、騒々しい腕白小僧の集まりだった。学校がひけると連れ立って近くの森へ女の子にいたずらをしに出かけたものだ、そして、弓や、ときには四マルクはりこんで買ったピストルで撃ち合いごっこをやったものだ。甘口のビールも飲んだ。ところが、そいつと現在の僕らとでは、こうして、いきなり挨拶ぬきで、道のど真ん中で、どたまをねらい合っている僕たちとでは、ひらきが、いや断絶がありすぎる。あんまりな違いようだ。

戦争は要するにちんぷんかんぷんの最たるものだ。こんなもんが長続きするわけはない。

するとこの連中のなかでなにか異常な事柄でも起こったのか？ 僕なんかには感じとれん、さっぱり感じとれんような事柄が。そいつを僕は見すごしちまったのにながい……

連中に対する気持は依然として変わらなかつた。それ

でもなんとかして彼らの残忍さを理解したい望みのようなものは残っていた、だがますますもって僕は逃げだしたかった、見栄も張りもなく、是が非でも、それほど、ふいに、僕には何から何まで恐ろしい誤解の結果に思えたのだ。

（まったく、手のほどこしようなはない、逃げるにしかずだ）結局、腹の中で考えた……

僕らの頭上では、額から二ミリ、いや一ミリのところを、焼けつくような夏の空気の中を、僕らの命をつけねらう弾丸が描きだす誘惑的な鉄鋌の長い軌道が次から次へうなりながらやってくる。

この弾の嵐とまぶしい日光の中でほど、僕は自分を無益な人間に感じたことはなかつた。いわば大がかりな、世界をあげての悪ふざけ。

このときは僕はまだ二十だった。遠くのほうに人っ子ひとりいない畑、あけっぱなしのがらんどろの教会、まるで百姓たちは、まる一日、村を留守にして一人残らず、在所のはずれのお祭りに出かけ、自分たちの持ち物を一つ残らず僕たちに安心して預けていったみたいだ、野原も、梶棒が宙に浮いたままの荷車も、田畑も、屋敷も、道路も、藪も、おまけに乳牛から、鎖につないだまんまの犬まで、要するに、一切合切。留守のあいだ、どうな

りと勝手にお使いくださいといわんばかり。なんとも親切なありさまだった。(せめてあの連中でもよそへ出かけなければ！——僕は腹の中で思った——人目があれば、まさかこんな恥知らずなふるまいはできなかっただろう！　こんな破廉恥な！　みんなの前じゃ気がひけたらう！)　だが、もはや僕らを監視する人間は一人もいなかった！　あとには僕らだけ、みんなが退散したあといやらしい行為にとりかかる新婚夫婦みたいだ。

また僕は考えた(一本の木の後ろにかくれて)、やっこさんをここへ引きずってきてやりたいものだ、さんざん評判を聞かされたデルレード(愛国詩人。一八一四)とかいう野郎を。どてっ腹に一発くらったとき、やっこさんならどうするか教えてもらいたいものだ。

路上にはいつくばって頑強に撃ちまくっているドイツ兵は、射撃の腕前こそ下手くそだが、弾は掃いて捨てるほどあるらしかった、たぶん兵器庫に何杯もつまってるんだらう。戦争はこのぶんじゃ、終わりそうにもない！　大佐殿は、正直なところ、あいた口がふさがらんほどの勇敢ぶりを発揮していた！　道のと真ん中を、しかも弾道の真つ中をあちこち行ったり来たり、まるで駅のホームで友人でも待っているような当たり前の様子で、ほんのちよっぴりいらいらしている程度だ。

僕のほうはだいいち野原が、こいつは最初に断わっておく必要があるが、野原が我慢ならん性分ときている、いつでも悲しい気分誘われて。果てしないぬかるみといい、人がいたためしのない家々といい、どこまでもつづく小道といい。だがこいつにさらに戦争が一枚加わったときには、もうこらえられん。土手の左右から、風が、猛烈なやつが、吹きだした、むこうからやってくる乾いた小さな物音にポップラ並木が木の葉の突風を混じえはじめた。見知らぬ兵士たちは相変わらずこっちを撃ちそこねてばかりいる、だが、おびただし死者にとりまかれて、僕たちはまるで死者の衣をまとったみたいな格好だ。僕はもう身動きする勇氣もなかった。

この大佐は、すると、人間じゃないんだ！　もうまぢがいない、犬より始末が悪いことに、奴には自分の死が想像できんだ！　同時に僕にはわかった、僕らの軍隊にはこいつのような奴が、勇敢な連中が、おおぜいいるにちがいない、そして、おむかいの軍隊にも、たぶん同じだけ。何人いるかだれにわかる？　全部でたぶん、百万、二百万？　たちまち、僕の恐怖は大恐慌にかわった。こんな奴らといっしょでは、この地獄のばか騒ぎは永久につづきかねない……奴らがやめるわけがあらうか？　人間世界の宣告をこれほど苛酷に感じたことは初めてだ

つた。

するとおれはこの世でたったひとりの臆病者おくびょうものなのか？
腹の中で考えた。たちまち恐ろしさにふるえあがった！
……英雄気取りの、猛り狂った、ものものしく武装した
二百万の人間の仲間に迷い込んだのか？ 鉄兜てつたもとをかぶった奴、かぶらない奴、馬のない奴、オートバイに乗った奴、わめきちらす奴、自動車に乗った奴、ラッパを吹く奴、撃つ奴、たくらむ奴、空を飛ぶ奴、ひざまずく奴、地面を掘る奴、陰にかくれる奴、道の上をちよろちよろする奴、火花をしかける奴、気違い病院のかわりに戦場に監禁され、一つ残らずぶっこわすのだ、ドイツも、フランスも世界じゅう、息のあるものは一つ残らず、ぶっこわすのだ、狂犬よりもいっそう狂った自分たちの狂気を崇めまつりおほまつり（こいつは犬ならやらんこつた）、千匹の犬よりも百倍、いや千倍も狂暴な、おまけにうんと悪質な狂気を！ おみごとなものだ！ まちがいない、僕にはわかった、僕は黙示録しやくろくそのけの十字軍に乗り込んじまったのだ。

肉欲に童貞があるように《恐怖》にも童貞があるもんだ。クリシイ広場をあとしたとき、どうしてこの恐怖が想像できたろう？ 戦争のさなかに実際に飛び込むまでは、人間どもの勇敢で不精で汚れた根性の中にひそん

だものを、だれが見抜くことができようか？ いまや僕は、大量殺戮さつりくと戦火めざしての総退却の中に巻き込まれてしまったのだ……こいつは根深いところからくるものだ、そしてそいつはついにやってきたのだ。

大佐は相変わらずびくともしない、僕の目の前で、土手の上に突っ立ったまま、將軍からの簡単な通信を受け取っては、弾の中で、ゆうゆうと読んで、すぐ細かく破り捨てるのだった。するとその手紙にはどれにも、この忌わしい行動を即中止せよという命令は書いてないのか？ すると誤解だったと上から言ってきたんじゃないか？ 言ったのか？ 忌わしい過失だったと？ カードの配り違いだったと？ まちがいだと？ 冗談の演習のつもりで、殺人の意志はなかったと！ ばか言え！ 《つづけたまえ、大佐、今のままでいいのじゃ！》たぶんそれがデ・ザントレイ將軍が、師団長が、僕たちみんなの親王が書いてよこしたことだろう、將軍からは大佐のもとへ、五分ごとに封筒が届けられる、そして、そいつを運んでくる伝令は恐怖で毎回すこしずつ血の気を失いおびえ上がつていくようだ。僕はその男を臆病の兄弟分にしたかった。だが友情を固めている暇などない。

するとまちがいじゃないのか？ こんなぐあいに、お互い顔も知らずに、撃ち合っていることは、禁じられて